

保育をつなぐ

～お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信～

Vol.3

保健室とつながる



渡邊満美



シリーズ「保育をつなぐ」お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信く」では、子ども・保育者・保護者がつながり、共に生き、共に創り、共に育つことを目指し、本園をめぐる多様なつながりを視点に発信する中で、保育を見つめ直していきます。

シリーズ第3回は、3年保育で入園し年中組に進級したA児がそれまで訪れたことがなかった保健室にやって来たことを通して、養護教諭がさまざまな悩み考え担任教諭と連携しながらかわった記録です。本園の保健室は廊下を挟んで4歳児保育室の真向かいにあるので、養護教諭の4歳児とのかかわりは特に密になります。

養護教諭がこの原稿を書いていた同じ時期に、A児の保護者が「ホットモタイム」(希望の保護者と副園長が語りあう会。人数は8名程度で不定期に開催)に参加し、A児についての同様の悩みを語っていて、そこでも、子ども、保護者、保育者のつながりが強く感じられました。

渡邊満美 (わたなべ まみ)
お茶の水女子大学附属幼稚園養護教諭。

*

保健室という場合は、子どもたちがそれぞれにやって来て、一人ひとりが程よい距離を保って過ごしている。しかし、つながりをもたなくないから保健室に来るわけではなく、誰かとながりがたくて来るように思う。相手との程よい距離感を保ちながら過ごしている人の中には、パーソナルスペースが侵されると怖くなり、表現が荒くなる人もいる。その一方で、人とかかわりの本当にちよつとしたことに気づけたり、驚くほど優しい言葉をもっていたり、気遣いが自然だったりする。保健室という場で過ごしてきたからこそ、気づく子どもたちの姿である。

保健室は誰かと誰かのつながりを意識せずには成り立たない場であると思う。

4月、まだ子どもたちも教師も緊張している時期、A児が保健室に来ていた。本園の保

健室は、絵本がたくさんあって、図書室の機能も兼ねているので、本を読みに来る子どもたちもいる場所となっている。A児は凶鑑の前に座り、本を探している様子。「年中になって、保健室が保育室と近くなったから来てみたかな。A児、保健室で過ごしたことはないな。手当てするときは緊張してたな」と、これまでを思い浮かべた。「何か探してる？」と声をかけると、「車なんだ、これじゃないんだよ」。そう言って、凶鑑の棚の本の背表紙を見ている。探す様子が真剣で、私も一緒に探すことにした。「どんな車なの？」と言うと、「荷物を運ぶ。この本、持つてるよ」。車の本を探しているけれど、自分の見たことのある本を探しているのだと思った。

しばらくすると本が見つかった。「そうそう、これだよ。これが作りたいんだ」。クレールン車だった。「よかった。これだったのね」。見つけた本を見て話をしていると、「箱を取

りに行こうよ」と誘われた。私は少し迷った。3学期なら迷うこともないのだが、今は担任が子どもと関係をつくっていく大事な時期。担任につなげておきたい。保育室をのぞいてみたが、担任はいなかった。園庭でたくさんの子どもたちと過ごしている。「どうしよう……」と迷いつつ、担任にどうつなげるかを意識しながら、A児と一緒に材料室へ箱を取りに行った。「これじゃないなあ……、これでもないなあ」。A児はそう言いながら箱を探す。「クレーン車ならもう少し良い箱もあるのでは？」と思いながら、私は見ていた。しかし、A児は箱を見つけては、組み合わせ、組み立てている。「どんなイメージだろう、……クレーン車を作るなら、もうちょつとらしくても……、作っていく中で伝えよう」と考えていると、「もういいよ。戻ろう。保健室で作ろう」と促された。保健室で作ってしまったのは、担任とつながるチャンスが生まれ

にくいので、「お部屋のほうが作るのにいろんなものがあるから、お部屋で作ろう。一緒に行こうか」とA児に言ってみると、少し不満そうな表情をしていた。そこには気づかないふりをして、A児と一緒に保育室に向かい、私も製作コーナーの一角に座った。

A児は、本を開き、箱と箱を組み合わせていった。組み合わせるのにゼロハンテープを使い始め、私は箱が動かないように支えた。A児は真剣に貼っていった。そこに、担任が「ただいまあ」と戻ってきた。私は「おかえり」と声をかけつつ、A児に目を向けると、真剣に続けている。「あれ、見てない。先生が戻ってきたことに気づいてないのかな」と、その時は思ったが、気づいてないわけではないことに後で気づく。

クレーン車を作っていると、担任が私の近くにきて、小さな声で「実はまだ目を合わせないの、一度も」「えっ、そうなの?」、そ

んなやりとりをした。ここで、A児が保健室にきた理由がわかった。それがわかったので、担任へのつなげ方は丁寧にしたと思う。「できた」と、A児は満足そうに私に見せてくれた。私は「これでいいのかしら？」と思った。「もう少し何か簡単にクレインらしいものが付くと、もっと大切な自分のものになるかも」と思っていた。

出上がって少し時間がたった頃、「手伝って」とA児が、保健室に戻っていた私のところに来た。担任の先生がクレインの部分の提案をしたようだった。A児は担任の声掛けがうれしかったものの、担任にどのように頼んでよいかかわからず、動けずにいたのかもしれないと感じた。「クレインね、お部屋で続きをしよう」と促すと、今度は自然に足が向かった。製作コーナーの近くに担任がいた。「S先生、どんなふうにするかと思う？」と声をかけた。「それね、そうそう！ そんな

な感じ」。担任の程よい距離感だった。クレインの部分の材料が足りなくなり、材料室に取りに行く。材料を探していると、担任の先生が他の子どもたちと一緒に入ってきた。「お待ちたせ」と言って、A児のクレイン車に手を加えて、どんどんクレイン車になっていった。A児の顔も最初と全然違った。安心なのだろうか。私は素直に「すごいなあ」と感心した。その後A児が、「手伝って」と保健室に来ることはなかった。

A児とのやりとりを考えながら、いろんな思いを巡らせた。一つは、担任とのちょっとした思いのやりとりができるかできないかで、私自身の子どもへのかかわり方にも大きな違いが生じるということ。もし、担任が「実はまだ目を合わせてないの、一度も」と伝えていなかったら……、これほどまでに担任と一緒に時間を重ね、つなぐことに心を砕いてい

ただろうか。もしかしたら、直接的につないでいたかもしれない、目を合わせその場が落ち着いたら離れるぐらいでつないだかもしれない、雰囲気を感じ取りあえる距離で過ごすだけでやりとりもなくつないでいたかもしれない、そんなことを考えた。

担任の、A児との距離をだんだんと縮めていく段階の踏み方も絶妙だと感じた。また、A児のクレールン車作りの、材料の選び方、組み合わせ方、作ることに對する向き合い方、それぞれにこれまでの幼稚園での生活の積み重ねが伝わってきた。担任の先生が替わって、新しい生活、少し戸惑うことがあるからこそ、これまでの過ごし方を再現しなかったのだろう。今まで過ごしてきた時間とこれからの時間がつながっていると実感できることは、安心できることなのだと思えて感じた。

A児とのかかわりから、数年前の自分のこ

とを思い出した。4月、新しい出会い。私は人事交流で3年ほど違う場所で過ごし、本園に戻ってきた。これから出会う子どもたちと過ごす保健室。これから出会う子どもたちが、昨日まで過ごしてきた先生との時間を、過ごしたその先生がいなくてもこれまでの時間がつながっていると感ぜられる形で始めたいと思っていた。そんな思いを巡らせていた私に、初めて出会った子どもたちは「O先生はね、こうしてたよ！ここはO先生と違うね！このけがをしたとき、O先生が治してくれたよー」いろんなことを私に教え、声をかけてくれた。子どもたちは、自分の中でもっている感覚を言葉にしてつなげようとしてくれた。私がつなげようとする思いは、子どもの思いに重ね合わせていけばよかった。

異動先の小学校で過ごした時間も思い出した。小学校の子どもたちと過ごしていた時間、

その時も、私は今と同じことをしていた。保健室には、体調の悪い子やちょっと教室に行きたくない子がいる。そんな子どもたちの中には、教室に戻るときの一歩が出にくい人も多い。そんな子どもたちと一緒に一歩を踏み出し、教室まで一緒に行くことも多かった。子どもの「ちょっと行きたくないなあ」という気持ちを私は引き受けつつも、私自身は教室に行けることが楽しかった。教室に行けば、担任の先生と子どもたちでつくる空気感を感じられるし、何より子どもたちがどんなふうになぶうに、教室と保健室をつなぐことをしていた。放課後はどの教室にも足を運んで、保健室で子どもがどんなふうになぶうに過ごしていたか、子どもが教室にどんな思いで向かったかなど、担任と子どもの話をした。そんな時間を重ねていくうちに、先生たちが保健室に来てくれることも増えていった。先生たちと関係がで

きてくると、子どもたちが安心して保健室で過ごすようになっていくことを、自分でも感じられた。

人と人がつながるときには、相手の思いを感じる大切になり、自分の思いを感じることも大切になる。受け取り間違い、勘違い、うまく伝えられない、などはよくあること。しかし、その間には、気づかないくらい細やかにつないでくれている人がいることがあり、場所がそのつなぐ役目を果たしていることもある。保健室という場所が子どもたちにとって安心できる場となるために、場所や人に助けられながらも、人と人のつながりをこれからもしっかりと築いていきたいと思っている。